

パネル IV

7. 一般病院における核医学：核医学検査受診患者の意識

一 矢 有 一

(国立病院九州がんセンター放射線科)

与えられたテーマは「一般病院における核医学検査への患者の意識」であるが、私の所属は大学病院ではない点からは一般病院であるが、がん施設であり患者のほとんどが癌患者で、したがって対象となる核医学検査も癌診断に関するものが主であることの点からは一般病院ではない。その点はお許しいただきたい。

核医学検査に対する患者の意識として第一に感じるのは患者の核医学検査に対する意識(関心)は低いことである。その理由は、1) 核医学検査が補助的診断法である場合が多いこと、2) 検査件数が少ないこと、3) 非侵襲的であること、副作用がない(少ない)ことの3つによると考えている。

いわゆる核アレルギーの観点に関しては、そのような例はほとんどないように思う。放射線被曝

に関して説明を求められても、X線検査と同程度の説明程度でほとんどは納得される。担癌患者であり、将来の発癌の危険性など問題にならないともいえるし、癌の化学療法に伴う副作用と比べると比較にならないともいえる。

ただ一方では、いわゆる放射線(放射性核種)の危険性に対して、われわれ診療を行う側のものがオーバープロテクションしていないかとの疑問も持っている。これにはもちろん、法的な規制を受けていることが大きなことは自明であるが。たとえば、RI施設へ立ち入りの際の履き物交換、壁の各所に貼られているRI取扱に対する注意書き、あるいは入り口の目立つところにあるハンドフットクロズモニターなど、必要以上に患者の不安を引き起こしてはいないかとの疑問である。